

東京市の水利と改善に對する私見（其二）

元東京市技師 准員 長崎 敏 音

第三節 各枝川

東京市の各運河たる枝川は隅田川を中心として、夫れより四方に展開配置されてをる。而して而かも相應に使用されたる結果は自然に發達を遂げて來たことは既記の通りである。然るに従來幅員の不規律水深の不同等の障礙比較的多大なるにも拘らず、二方水利使用促進上の爲めには止むなく、逆に發展を告ぐるに至つた、即ち隅田川を中心として市内各枝川に及ぼし、且つ水路遠近の輸送に適應せしむべき多くの機關は多くの年月よりしたる經驗と運用との點より野性的ながら發達を遂げたのである。換言せば解荷役に關する諸般の設備及び機關は充分に充實されてをる。左あれ、各枝川の沿岸河岸地には各種の倉庫が櫛比建設され、或は各所に物揚場の配置を見るありて、以て隅田川と各枝川との關係は既に天然の港狀を爲してをる。故に隅田川の改良と同時に此の各枝川の改善は一層に水利上に便益を與ふることを得るは明かなるものである。然らば東京市の各枝川の狀態は如何、次に之れにつき記述せん。

各枝川の配置狀態は第三號圖の通りであるが、其の配置を見るに地勢の關係と土地發展の關係により隅田川の左岸たる本所深川に偏倚發達し、尙右岸にありては京橋日本橋の如き所謂低段地に於て發達したることは之れ天然の結果で止むなきが唯今日に於て考慮せば如何にも運河の配置は野性的な

る域を脱し得ざりしことを遺憾とする。然り東京市の運河は不規律の配置であると。同時に亦餘り水利上について當局者も近年に至るまで考慮しなかつたが如き嫌がある。即ち東京市の河川は先年大浚渫工事計畫前の状態を追想せば甚だ不徹底であつた。亦同時に甚だ不注意であつたと思考する。換言せば時勢の關係其の他の事情上已むを得ざりしものあらんも事實上當局者が從來餘りに深き注意を拂はなかつた。其の結果は一般に水深を埋没せしめ、延いて各枝川の滯筋を失し、同時に一般に河底が高まり、殊に兩岸の埋没は甚だしかつたのでありし。而して夫れ等の結果よりしては遂に干潮時に於て泥土を露出し、爲めに汚臭は遠慮なく臭威を襲撃するに至つた。然れども永年の慣習は如何ともするなく、亦小數の船頭等の嘆聲は當局の耳朵に達せなかつたが如くてあつた。然るに其の程度日一日と愈々甚大なるものとなり、且つは一般舟運上の障礙大なるものあるは勿論、亦衛生上看過し得ざるものありとの議論は漸くに高まつたのである。开は明治四十年の頃であつた。當時予等は此に於て一大浚渫計畫の必要あることを稱呼した。然れども當時の經濟状態は遂に予等の計畫を容るゝ所とならざりしが、斯くして逐次延引に延引を重ねたるも、益々埋没の度彌増すと同時に干潮時に於てさへ普通傳馬船の通航にも差岡を來たすに至つたにより、此に於て市内河川の大浚渫工事の計畫が熟し、遂に確定するに至つた。之れ明治四十三年でありし。即ち之れによつて市内各枝川たる五十四ヶ川及び此等枝川の各河口に亘りて、其の延長三萬七千三百五間餘此の面積五十六萬四千九百五十九坪に亘りて、土量立積二十五萬三千二百二十九坪餘、此の舟坪約三十八萬坪となるを浚渫して、平時深さ約二尺七寸の浚渫を行つたのであつた。勿論之れが工事の施行上兩岸の護岸に對し其の若干を改築し、或は護岸の根固工事等を行ひ、亦浚渫土砂の處分地として深川區平久町地の海面五萬九千六百七十一坪餘の半未成の埋立を行ひ、尙同町の前面地先即ち平久町及び越中島地先に於て第一號乃至第三號の埋立地面積十一萬五千五百七十六坪餘、外に外濠筋の整理として同川筋沿岸に八千三百五十七坪餘の

埋築地を完成せんが爲め工費約金二百四十六萬三千餘圓を投じ、大正六年度を以て特別事情ある部分的の工事を除くの外は全く竣功を告げたるもの之れ即ち今日の各枝川の現狀を爲すものである。大に之れ等の結果浚渫及び整理されたるもの並に埋立地間に於て新に得たる運河の區域延長面積廣狹深度は左記第一號表に示す通りである。

第一號表 河川 表

備考 深度ノ零點トハ、靈岸嶋量水標ニ於ケル零點ヲ云フ

河川名	區 域	延 長	面 積	最 幅 員	最 幅 員	平 均 幅	深 度
荒 川	橋場より御濱御殿に至る	四、九五、一〇	五五〇、七二、五				零點下 一、二、五 六、〇
大川派川	左岸深川區越中島町八番より越中島最端に至る、右岸佃町より佃島町二十六番地に至る	四六三、二	七一、一〇、二	二六、九五	一三〇、〇	一五三、五	同
大島川	北深川旗井町地先より大島町を経て龜久町に至る、南深川區越中島陸軍糧秣廠川口より佃町を経て辨天橋に至る	一、一〇、〇	一六、一七五、〇	四八、〇	七、〇	一四、六	同
洲崎川	京橋洲崎町四番地より洲崎辨天町二丁目十六番地に至る	四七五、四	四、五八一、〇	一〇、八	六、九	九、六	同
大支島川	深川區諸町十三番地大島川油堀川より今川町南仙臺堀川河岸	四三六、〇	四、七三四、九六	一四、四	六、二〇	八六	同 四、三、〇
東支島川	深川區入舟町三先大島川より同區扇町先仙臺堀川に至る	四二六、〇	五、二七九、〇	一四、二	九、〇	一二、四	同 三、〇
仙臺堀川	南深川區佐賀町一丁目より大橋川交叉口に至る、北同區清住町より大橋川交叉口角に至る	一、〇二四、四	一九、三〇八、六	二四、二	一三、六	一八、八	同 四、〇
西支島川	南深川永堀町仙臺堀川交叉口より油堀交叉口に至る、北同區萬年町仙臺堀交叉口に至る	一四三、〇	一、三一二、一	一〇、一	五、〇	九、二	同 三、〇

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

河川名	區	城	延	長	面	積	幅員最廣	幅員最狹	平均幅	深 度
南黑江川	深川區中島町十六番地大島川角より蛤町二丁目一番地松島橋に至る		二二六、六	一、八七三、九八	一〇、五	三、三	八、二七	〇、〇	零點下	
北黑江川	深川區伊深町一番地先大島川西支川角より黒江町四十番地先に至る		七八、〇	七八七、八	一一、七	七、二	一一〇、一	二、〇		
中之堀川	深川區堀川町四番地大島川西支川より佐賀町一丁目十三番地先隅田川角		二〇一、〇	一、八四七、一九	一一、二	五、三	九一、元	三、〇	同	
中之川	深川區龜失町二番地大島川より龜久町十六番地仙臺堀川に至る		四〇三、〇	七、三五五、五六	二一、八	一四、五	一八、五	四、〇	同	
油堀川	深川區佐賀町十八番地隅田川出口角より島田町七番地築地橋裏角に至る		九三〇、四	一四、五一四、二四	一五、三	九、四	一三、八	四、〇	同	
油堀東支川	東深川區敷地町油堀本川より東仲町に至る西側區公園地内油堀川より東仲町に至る		一四四、六	九六〇、四	九、七	三、六	六、六	一、〇	同	
油堀西支川	東深川區公園裏橋より東仲町に至る西側區山本町公園裏橋より東仲町に至る		三二五、四	九七〇、六	四、三	一、三	三、一	未 調	零點下	
二十間川	南深川區豐住町六番地橋川交叉口より横千交文口より横十間川石島町十五番地大橋町川に至る		四四〇、〇	九、九〇六、九	二二、五	一七、〇	二二、五	四、〇	同	
十間川	南深川區四平井町富士見橋より東平井町に至る北同豐住町富士見橋々臺より同町二百八十九番に至る		五一一、〇	四、八五四、五	一一、〇	八、八	九、五	二、〇	同	
小名木川	南深川區大工町二入番地隅田川出口の隅より三島橋に至る北深川西元町より藤江町太島橋々臺に至る		一、三五三、六	二、三三、七六六、八	二七、五	一三、三	一七、六	四、〇	同	
五間堀川	北及東本所區松井町三丁目十二番六間堀分岐點より林町東森二丁目九間堀分岐點より南及西深川東森下目六間堀分岐點より東森下町十九間堀分岐點より小名木川に至る		五八〇、〇	三、九六七、九	一一、〇	四、八	六、八	一、〇	同	
六間堀川	本所區松井町二丁目一番地松井分岐點より七番地小名木川に至る		五〇四、〇	三、一五七、二	八、〇	四、四	六、三	二、〇	同	

神田川	三味線堀川	須賀川	新堀川	山谷一川	曳船川	源森川	北十間川	横十間川	大横堀支川	大横川	堅川
牛込神樂坂一丁目十二番地先門橋東詰より 浅草下平右工門町廿四番地先柳橋東詰に至る	西下谷竹町大下水より向柳原猿屋町を経て 新堀川須賀堀合に至る東下谷小島町より 須賀堀に至る	北浅草御蔵前片町より須賀橋を経て隅田川 に至る南浅草須賀町より須賀橋を経て隅田川 に至る	浅草區北松山町田島橋大下水落口より南松 山町菊屋橋及阿部川町を経て三味線堀に至る	浅草地方今戸町より同區今戸町に至る	本所區請地町一六一番地郡界より向島仲の 郷を経て小梅尾町源森川に至る	北本所小梅尾町より隅田川に至る南本所中 の郷八軒町より同尾町に至る	南本所區向島町押上町十間橋東橋々隅より 北梅瓦町一三番地先小梅橋々臺下南に至る 北押上町一六六番より中の郷業平町一八番 地先小梅橋々臺下角に至る	南葛飾郡境より榊島橋橋臺角に至る北深川 豊住町より本所柳島橋々臺に至る	深川區茂森町三番地より扇町二番地に至る	東深川區西平井町一番地先より本所中の郷 業平町に至る、西深川木堤町三十番より本 所中の郷八軒町に至る	本所區元町尾上河岸隅田川口より同區松代 町三丁目旅所橋十間川に至る
二、三九五、〇	四九五、〇	二四八、〇	六二九、〇	三七八、〇	四八九、四	三三五、〇	五六五、七	二、〇二二、四	二二五、〇	二、五〇三、五	一、五二一、四
〇三一、三七四、五	二、五六五、〇	一、四八八、〇	一、九四八、七	二、七九七、〇	二、一三八、五	四、〇七七、二	五、五七三、二	二二、六四一、六	二、六四一、五	四三、〇九六、〇	二、二一九、八
二六〇	五、五	一一、〇	八、〇	二〇、〇	五、〇	二、三三、八	一一、六	一三、八	一三、七	二二、二	四一、〇
九、〇	三、五	三、八	一、八	三、〇	四、〇	二、八	八、二	五、五	八、〇	六、六	八、八
一三一、一	五、二	六、〇	三、一	七、四	四、四	一一、二	九、八五	一一、二	一一、二	一七、二	一九、二
主 零 點 下 三一、〇	主 零 點 上 二、三	零 點 下 一、〇	零 點 上 二、〇	主 零 點 下 三、〇	零 點 上 二、〇	同	主 零 點 同 三、二、五	主 零 點 同 三、〇、五	同	同	同

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

河川名	區	域	延長	面積	積	幅員最廣	幅員最狹	平均幅	深度
江戸川	小石川、關口町一四九先駒塚橋東詰より船河原橋際市兵衛河岸に至る		一、三五〇、〇	二、〇一五、〇	〇	一六、〇	五、〇	八、九	零點上 九、四、七
龍閑川	北龍閑橋際より玉出橋際に至る 南同上		六二五、三	四、二二三、四	七、八	四、九	六、八	六、八	零點下 〇、〇
濱町川	東神田物原橋より日本橋横町三丁目に至る 西河區町所より日本橋横町に至る		一、〇〇三、三	八、〇〇四、三	九、九	六、六	八、〇	八、〇	同
東堀留川	西日本橋法界寺橋より西萬河岸に至る 東同上 北、東北萬河岸より西萬河岸に至る		二九四、四	四、二六七、八	一九三	七、四	一四、五	同	同
西堀留川	西、日本橋荒布橋より米河岸に至る 東、同區同所より小船河岸に至る 北、同區同所より小船河岸四六號より五一號に至る		二〇五、九	三、六二五、六	一九五、五	八、五	一七、六	零點下 四、〇	同
箱崎川	北、日本橋箱崎橋より大洲際に至る 南、同區箱崎橋際より大洲際に至る		五五五、九	一三、一五〇、七	三七、五	一三、一	二二、三	同	同
日本橋川	南、日本橋一石橋より大川橋に至る 北、同區同橋より豊海橋際に至る		九七六、六	三〇、一四五、〇	四七、〇	一九、八	三〇、八	同	同
鐵砲洲川	京橋區明石町廿二番地先淡橋々臺より本淡町廿一番地先に至る		三五九、三	二、六七一、七	一一、〇	三、八	七、四	同	同
龜島川	東、南京橋區富島町より新船松町に至る 西北、日本橋茅場町より同區淡河岸に至る		五八三、八	一五、三六一、六	八六、〇	一五、五	二六、三	同	同
新川	東、京橋區富島町より三の橋際に至る 西、京橋豐岸島より三の橋際に至る		三一〇、〇	二、六八七、五	一一、四	五、四	八、七	同	同
楓川	東、京橋區高代町一番より日本橋川口に至る 西、同區元材木町より日本橋川口に至る		六六七、〇	九、三七九、〇	二〇、一	一一、四	一四、六	同	同
櫻川	北、京橋區北櫻河岸より本八丁堀五丁目一先に至る 南、同區南八丁堀より本淡町に至る		四〇六、五	八、二六三、〇	二六、八	一六、五	二〇、三	同	同

入船川	西、京橋新富町より南新富橋に至る東同區北、船見橋より新富橋に至る	二二四、二	一、三七〇、八	八、三	四、九	六、四	零點上 〇、五
築地川	大川右岸勝國渡より築地一圓を圍繞する一川、瀧宮北部並に海軍大學西部を圍繞する一川、京橋區北紺屋町比丘尾橋より竹河岸白魚橋際に至る南同區南紺屋町金六町白魚橋に至る	二、三二三、六三八、八二六、七六二、七〇〇	三、三三五、〇	一五、五	六、二	一六、七	零點下 五、〇〇
京橋川	東、京橋區沙留川より京橋川に至る西、同上	三三三、〇	三、三三五、〇	一五、五	五、八	一〇、〇	同 三、〇
三十間堀川	南、芝區土橋より隅田川に至る北、京橋區土橋より隅田川に至る	六一〇、〇	一〇、八〇一、六	二〇、〇	一六、二	一七、七	同 四、〇
沙留川	南、芝區金杉濱町より麻布郡界(廣尾町)に至る北同區同町より麻布富士見町郡界に至る	八二五、〇	二、三、九一七、七	二七、〇	六、三	一六、九	同 三、〇〇
古川	北、月島西河津通り七丁目八番地先より東河津通り六丁目八番地に至る南、同七丁目二より東河津七丁目に至る	二、四五六、〇	一六、七五四、五	二一、八	三、九	六、八	零點上 九、三〇
月島川	北、月島西河津通り七丁目八番地先より東河津通り六丁目八番地に至る南、同七丁目二より東河津七丁目に至る	二九〇、六	六、七七〇、九八	二七、二	一七、六	二三、三	零點下 四、〇
佃川	北、佃十番地より新佃東町一丁目廿一番地に至る南、月島西河津通り一丁目二より東河津通一丁目二番地に至る	三三三、九	七、九七三、六	二五、三	一九、五	二五、四	同 四、〇
佃川支川	北佃町二より五六に至る南佃町一より三六に至る	二〇一、九	一、八二五、一七	一七、一	四、四	九、〇	同 三、〇〇
外濠	京橋區丸屋町三番地土橋々臺上角より飯田町四丁目三崎橋々臺神田川出口に至る深川區平屋町仙臺堀より扇橋町二丁目大橋川に至る	三、〇三八、六七五八、六七〇、一三五六、五	四、八九七、八	一〇、九	七、〇	一九、三	同 四、三〇
福富川	深川區吉永町七番地先より同上五番地に至る	四八九、〇	四、八九七、八	一〇、九	九、一	一〇、〇	同 二、〇
福富川支川	深川區吉永町七番地先より同上五番地に至る	七四、〇	六八〇、八	一〇、〇	八、五	九、二	同 二、〇

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

計	河川名		延	長	面	積	幅員最廣	幅員最狹	平均幅	深 度	
	箱崎川支川	區									
芝 區 芝 浦 埋 立 地 内	東、日本橋區箱崎川分流點より隅田川に至る、同上	深川區平久町二丁目地先洲崎川より鹽濱町地先海面に至る	五九、五	一、七九〇、〇					三〇、〇	同	五、〇
	深川區平久町一、二丁目と鹽濱町間	深川區平久町一、二丁目と鹽濱町間	二〇五、三	二、〇五三、〇					一〇、〇	同	三、〇
	深川區平久町一、二丁目と鹽濱町間	深川區平久町一、二丁目と鹽濱町間	三〇二、五	三、〇二九、四					一〇、〇	同	四、〇
	深川區辨天河岸地先、大島川より埋立地一、二號南端海面に至る	深川區辨天河岸地先、大島川より埋立地一、二號南端海面に至る	五二四、九	九、三二三、八	二〇、〇	一五、〇	一七、八	同	一〇、〇	同	三、〇
	深川區鹽濱町及埋立地一號地間東端より越中島及二號地間西端に至る	深川區鹽濱町及埋立地一號地間東端より越中島及二號地間西端に至る	六二一、四	一、二四七、五	〇		二〇、〇	同	二〇、〇	同	四、五
	月島及二號地及新一號地間	月島及二號地及新一號地間	二九五、〇	五、九〇〇、〇			二〇、〇	同	二〇、〇	同	四、五
	芝區新濱町日ノ出町間北端より第一號地第一號地地間南端に至る	芝區新濱町日ノ出町間北端より第一號地第一號地地間南端に至る	六八四、一	二〇、六三九、三			三〇、〇	同	三〇、〇	同	六、五
	芝區金杉新濱町、南濱町間	芝區金杉新濱町、南濱町間	八二、八	二、四七八、〇	三五、〇	五、〇	二九、九	同	二九、九	同	六、五
	芝區日ノ出町、埋立一號地間東端より第四第五號埋立地間南端に至る	芝區日ノ出町、埋立一號地間東端より第四第五號埋立地間南端に至る	九五六、五	一六、三四四、三	三三〇、〇	一五、〇	一七、〇	同	一七、〇	同	六、五
	芝區南濱町新芝町間より第一、第三號地間南端に至る	芝區南濱町新芝町間より第一、第三號地間南端に至る	二八九、六	五、五五八、二	二二〇、〇	四、三	一九、二	同	一九、二	同	四、五
	芝區新芝町第五號地間北端より第三第四號地間東端に至る	芝區新芝町第五號地間北端より第三第四號地間東端に至る	二七七、一	三、七六〇、四	一五、〇	一〇、〇	一三、六	同	一三、六	同	四、五
			三三〇、〇	一、一五九、七	三、三〇〇、〇	大川派川 二六九、五	油堀 一三、〇	西支川	二五、五		

東京市の河川

以上の表記によれば各枝川の数は六十有五河川に達し、其の延長四萬三千九百十六間、其の水面積六十三萬七千八百七十七坪六合を數ふるのである。尙ほ又表記の通り隅田川を算入せば河川數六十有七河川となり、其の延長四萬九千三百三十間六分となり、今之れを里程に換算せば二十二里三十町十間六分の長距離となる。而かして此の長距離に於けるの水面積は實に百二十五萬九千七百一坪三合一勺となる。尙ほ此の外隅田河口の分即ち永代橋以下砲臺外に至たる滯筋航路の延長五千四十間、此の面積四十四萬四千坪（但し永代橋以下月島地先までの水面は重複す）を合算せば其の延長二十五里五丁十間六分、此の面積百七十萬三千七百一坪三合一勺を算するに至る。而かして之れ等の兩岸に於いては殆んど全部に亘りて護岸を設けられてあるが、其の延長は八萬四千七百三十五間であつて、之れを里程に換算せば三十九里八丁十五間となり、其の内延長一萬七百七十八間五分の私有護岸及び其の内僅少の他官廳所屬の分を除いては、其の全水面積及び護岸の大部分は東京市の管理する所となつて居る。

尙亦特に一言を要するは、第一號表下欄に示すが如く各枝川に於ける深度の異なること之れてある。此は勿論可及的各枝川を通じて同一なるを以て理想とすべきものである。然るに其の兩岸に於ける護岸の薄弱及び其の基礎根入の不同、其の他河川幅員の大小の如き種々なる原因によりて一定に浚渫し得ざるものがある。之れ特に、東京市河川舟運上についての一大缺點と言はざるを得ない。但し此の點については後段更に項を設けて論及するつもりである。

次に各枝川に亘りて、其の河川の成因及び現狀等について一言略述することゝしやう。

(一)市の南部に屬する河川

古 川

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

本川は芝區金杉の川口より麻布區廣尾町地先の市郡境界に至る區間で、此の延長二千四百五十六間を有し澁谷川の末流である。而して本川の赤羽橋附近に於ては赤羽川の稱があつて、亦金杉に至ると金杉川とも稱され、或は新堀川とも亦新川とも稱へらるゝことがある。

澁谷川の流末は昔時にありては網坂の下を流れて田町の附近に於て芝浦に注ぎたる入間川と稱するものと、及び赤羽川との二川に分れたものであつた。然るに寛文年間以前に前者入間川の流を停止し、且つ其の後寛文七年及び延寶三年の兩度に亘り赤羽川に大浚渫を行ひたる結果は、傳馬船を溯江せしめたのであつた。而して新堀川の名稱は實に之れより起り、且つ新堀川及び新川に對して其の上流を古川と稱するに至つたのである。而して其の後元祿十一年白金御殿造營に際して、上流四ノ橋附近まで掘り擴げられたるが爲めに汐入りとなりたるよし。現時川幅最大二十一間八分より最小三間九分に至り其の平均六間八分を有して居る。橋には川口の鐵道橋、金杉橋、將監橋、芝園橋、赤羽橋、中ノ橋、新堀橋一ノ橋、山岸橋、二ノ橋、三ノ橋、古川橋、四ノ橋、青山橋の十四橋が架設せられて居る。水深は川口より金杉橋附近は稍々深きも、之れ以上は極めて淺く、即ち漸やく零點上三尺より九尺に至たる不同である。

本川は芝區の大部分、麻布區の一部に於ける貨物集散上極めて樞要なる河川である。

汐留川

本川は芝離宮正門脇の川口より蓬萊橋を経て土橋の上に於て外濠筋に接續する區間で、此の延長八百二十五間の區間である。即ち溜池より流下する大下水及び外濠筋の流末を受くるのである。

汐留川の汐留と稱するは今の土橋のある所に於て土橋を設けて外濠の水を堰きたる事より起りたるもので、其の當時は蓋し明曆萬治の比なるべくと思考する。而して汐留川は寛永圖に依るときは溜池より三十間堀に曲り折れて盡かれあるから、今の蓬萊橋よりして濱離宮の横へ通じたるは其の頃に

於ける疏通なるべく、即ち明曆萬治の年間と思考さるゝ。

現時川幅最大二十七間より最狭六間三分に至りて、其の平均は十六間を有して居る。橋には濱離宮通用門橋、汐先橋、東門橋、蓬萊橋、新橋、難波橋、土橋の七橋が架設されて居る。本川の水深は零點下四尺より三尺を有する。

本川は汐留驛の荷扱場及び其附近の共同物揚場へ集合する諸船舶の爲め、並に芝口一帯に於ける樞要河川である。

三十間川

本川は前記の汐留川に於ける蓬萊橋より岐れて京橋川へ接続する區間で此の延長六百十間を有して、汐留川と京橋川間の連絡及び銀座一帯の爲め樞要なる河川である。

本川は川幅往時三十間ありしより其の名の起つたものであるが、現今の左右にある河岸地及び道路敷は昔時の土揚場であつたのである。而して前項汐留川の流末なりしことは既記の通りである。尙寛永圖によれば此の川より東は海面の如くに記されて居る。蓋し三十間堀は海面の干潟と陸地との差別明かならぬが爲め、一には舟入堀となり、亦一つは堤塘の土を得んが爲めに設けられたるが如くに思考さるゝ。現時川幅最大二十間より最小十六間二分に至り其の平均は十七間七分を有する。橋には下流より出雲橋、木挽橋、三原橋、旭橋、豊玉橋、紀伊國橋、水谷橋の七橋が架けられて居る。水深は零點以下四尺を有する。而して紀伊國橋の少しく上手から東に折れて、現今の京橋電話交換局下を過ぎ、蛤河岸に至り、櫻川の上に接続したる舊水路を現在の如く、水谷橋まで一直線京橋川に堀替へたるは、實に明治三十九年のことであつた。

築地川

本川は京橋區築地小田原町一體より濱離宮脇に至る區間に跨つて居る。即ち(一)明石町渡船場附近

の川口よりするもの、(二)勝鬨渡船場附近の川口よりするもの、(三)濱離宮並に海軍大學構内用地間の川口よりして濱離宮正門附近より折れて采女橋に至るもの、三川口を有する。内部は築地一帯を環流包擁する水路の全部で其の延長は二千三百二十三間六分を有する。

本川は築地一帯にあるを以て此の名あるは明かて、且つ築地一帯は明曆大火後に於て其の焼土を以て埋め立て得たるものであるから、其の出来は明曆四年頃であるべしと思考する。而して築地とは地を築きたるより名けたるものである。然るに現在の明石町南小田原町の埋築を行はれたるは勿論其の以後の事である。現時川幅は大小不同て、其の最廣は二十七間最狹は六間二分に至り平均十六間七分を有する。架橋には明石橋、新築橋、堺橋、安藝橋、起生橋、海軍橋、海軍裏橋、采女橋、萬年橋、祝橋、龜井橋、合引橋、築地橋、伊藤橋、輕子橋、備前橋、小田原橋の十七橋が架けられて居る。水深は河底に第三紀層の露出する箇所あるが爲め不同なるが、即ち各川口の零點以下五尺より内部は同二尺に至るまでの相違がある。本川は築地木挽町新富町小田原町一帯の水運上必要なる河川である。

佃川及び月島川

佃川は佃島及び月島第一號地先間の水路で此の延長本川は三百十三間九分にて亦支川は二百一間九分を有して居る。月島川は月島第一號地と第二號地間の水路で、此の延長は二百九十間六分を有する。而して之れ等は佃島月島に於ける新工業地水運上相當に使用さるゝ河川である。

佃島の開けたるは遠く天正年間であるが、而して其の成因は勿論寄洲である。即ち平川河口(即ち今の日本橋川龜島川のこと)に當りたる寄洲により成因したものである。亦月島は明治二十五年隅田川航路の浚渫土を以て埋築されたものである。即ち之れ等は石川島と共に隅田川口に當りて寄洲の成因よりして遂に此の地を成せるものなるを認めざるを得ない。現在川幅は前者佃川の本川は其の最廣二十五間三分より最狹十九間五分に至りて、其の平均は二十五間四分を有する。亦其の支川は最廣

十七間一分より最狭四間四分に至りて、其の平均は九間を有する。次に後者月島川は最廣二十七間二分より最狭十七間六分に至りて、其の平均は二十三間三分を有して居る。架橋は前者には其の本川の川口より初見橋、新佃橋、佃橋の三橋が、支川には小橋の一橋が架かつて居り、亦後者には月島橋が架設されて居る。水深に見るに佃川本川は零點以下四尺、支川は稍々淺く即ち同零尺より二尺を有し、亦月島川は零點以下四尺を保つて居る。

入船川

本川は築地川と櫻川との連絡上に於ける必要水路で、此の延長二百十四間二分を有して居る。本川は一名入船堀とも稱され、現在の新富町の地が明治元年に武家屋敷を改めて新に遊女町を置かれたるとき新に開鑿されたものである。而して其の後明治四年右の遊女町が撤去せられたるも、尙此の土地を新島原と稱されたるは入船川を以て島となりたるによるならんと思考さる。現在川中最廣八間三分最狭四間九分に至つて其の平均は六間四分を有して居る。架橋には南新富橋、新富橋、船見橋、伊藤橋、北船見橋の五橋が設けられて居る。水深は川中の關係上浚渫し得ざるものあるが爲め、零點上五寸を保つに過ぎない現況である。

本川は既記の如く櫻川、築地川間の連絡、必要水路たるの外は兩岸高く一般荷役上不便あるがゆゑに沿岸の薪炭商等の一部の爲めに使用さるゝ位の現狀である。

鐵砲洲川

本川は築地川より鐵砲洲の外圍を爲す河川で、此の延長は三百五十九間三分を有して居る。鐵砲洲の地が竣成せるは蓋し築地の竣功した時代頃と同様なるべく、故に隨つて本川の掘鑿も亦同時頃なるべしと思考さる。而して鐵砲洲とは八丁堀以南の今の入船町、新榮町、新湊町、本湊町、船松町、明石町附近の總稱である。即ち『寛永年間島原攻城の爲め蘭人大砲數門を献じ將軍築地の濱に演習す』とは此

の所を指すのである。現在の川巾最大十一間より最小三間八分に至りて平均六間四分を有する。架橋には川口より鐵砲洲橋、小橋、無名橋、見當橋、浦堀橋、新湊橋の六橋がある。水深は川巾狹隘の爲め僅かに零點を保つに過ぎない。

本川は築地川より岐れ明石町と元外國人居留地との中間を流るゝものであるが、本湊町地先で隅田川に接続する。本川は河底淺く川巾狹隘につき、沿岸漁船の碇繫及び糞尿船汚物積船の外多少の貨物上下するに止まるのである。

市の中部に屬する河川

櫻 川

本川は京橋川の流末で、而して龜島川口に流下する此の延長四百六間五分を有し、楓川に接続してある水路である。本川は本八丁堀とも稱され、亦寛永圖によるときは八丁堀船入と記入されて居る。故に元は船入の爲め浚渫されたものゝ如くに見受けらるゝ。而して其の當時は此の川を限りて南方即ち今の築地邊一體は全く海面であつたのでありし。又本八丁堀とは現今の楓川即ち紅葉川筋の材木町の八丁目にあつた地、今の八丁堀の所なりによつて起りたるもので、尙又八丁堀入船とは八丁堀川紅葉川のことに入るゝ、滯筋を指したる意なるべくと思考さるゝ。而して櫻川とは其の由因明かならぬが一方に紅葉川あるよりして、單に春秋關係を因みて櫻を取りたるにはあらざるか。現時川巾の最大二十六間八分より最小十六間五分に至りて其の平均二十間三分を有する。架橋には川口より稻荷橋中の橋、櫻橋の三橋が設けられておる。水深は全川を通じて零點以下四尺を有する。

本川は上流は京橋川を経て外濠川へ接続し、亦三十間堀川にも接続し、以て汐留川との連絡あるの外、前記楓川を経て日本橋川との連絡あるのと、且つ沿岸大倉庫多く比較的使用多き河川の一つである。

京橋川

本川は京橋區北紺屋町地先に於て外濠川より分岐流下して、銀座通りの京橋を経て櫻川へ流下接続する此の延長三百三十三間の區間である。本川の疏通を見たのは慶長初年の頃なるべくと思考する。寛永圖によれば京橋川を畫かれてあるが、其の大體は今日の現状の通りなるも、外濠筋とは汐留堤を築きおきて其の流水疏通せざることとなつておる。而して之れを通せしめたのは萬治年後のことであると云はるゝ。昔時京橋川と汐留川との中間は海面であつて、且つ日比谷附近まで海水浸されたのであつた。太田道灌の江戸城を築きし時代には此の地の入江深く城下まで入込みしものなるが、而して三十間堀筋までは較々陸地の體を爲したのは、蓋し明曆萬治以後のことならんと推せらるゝ。現在川中最大十五間五分より最小五間八分に至つて其の平均十間を有しておる。橋には下流より白魚橋炭谷橋、京橋、紺屋橋、比丘尼橋の五橋が架設されておる。水深は零點以下三尺を有する。

本川は三十間堀川を以て汐留川との連絡あり、亦外濠筋との接続するを以て舟運上緊要なると、加ふるに沿革には竹材商の竹河岸あり、又青物市場あるを以て相當に使用さるゝ。

日本橋川

本川は永代橋詰の川口より日本元標の位置なる日本橋を経て、日本橋區吳服町地先に於て外濠筋へ連絡する延長九百七十六間六分の區間である。本川は昔時の平川と稱したものである。文明八年の江月城靜軒詩序には、「城之東畔有河、其流曲折而南入海、商旅大小之風帆、漁獵來去之夜簞、隱見出沒於簑雲之際、到高橋下繫纜、開權、鱗集蚊、合日々成市云々」とあるは此の平川のことなるべく、而して此の高橋と言ふは今の日本橋を指したるものなるべく、又此の地下平川村と稱したるが如くに思考さるゝ。即ち現在の魚河岸の古きことを味はるゝ。本川は元江戸河とも呼ばれ、今の靈岸島附近を江戸河口と言ふた。而して今日の箱崎川の合流點より下流を新堀川と稱するは新に堀りたることを語るものである。而して當時平川は河口に江戸中島今の靈岸島を成したのちは今の龜島川を通じて海へ注ぎしものと

あつた。然るに其の後徳川氏入國後即ち寛永以前に於て港橋上流より永代橋詰に至る所謂新堀川を掘割つたものである。現時川巾廣きは四十七間狭きは十九間八分に至りて其の平均は三十間九分を有する。橋には川口より豊海橋、港橋、鍍橋、江戸橋、日本橋、西河岸橋、一石橋の七橋が架けられておる。又水深は全川を通して零點下四尺を有する。

因に明治三十八年頃埋築された稻荷堀を以て境せる今の小網町は、日本橋川即ち往時の平川の中川であつた。而して之れを小網中島と稱されておつたのであつた。即ち往時の日本橋川は江戸橋下にて二流に岐れ、西へ流下せるは今の日本橋川で、東へ流下したのは稻荷堀であつたのでありし。仍て今の地形を案するに現今の靈岸島及び箱崎川等は以上の如き流末の影響を受けて成因したことは疑ないのである。

本川は沿岸には倉庫櫛比し、隨つて舟運上の營業者多く、魚市場、干物市場、青物市場等あり、加ふるに外濠を経て遠く神田川へも連絡するから都下第一の舟運ある河川である。

龜島川

本川は靈岸島の南端に於ける川口より日本橋川を交叉して、箱崎川へ通ずる此の延長五百八十三間八分を有する區間である。本川は往時の平川(日本橋川のこと)の流末なることは前記した通りなるが、現在は箱崎川の流末の如くにも見受けらるゝ。隨つて本川と箱崎川とを通じて大川の一支出の如く説くものもあるも事實でない。即ち日本橋川に於て述べたが如く、靈岸島たる平川河口の三角洲によりて出來たものである。故に日本橋川の下流たる新堀川の堀鑿を見ざりし以前にありては、平川(日本橋川)の本流たりしものであつた。而して龜島川の名稱の起りは龜島橋、龜島河岸の名に因みたるもので且つ龜島町の名は茅場町の南面陸地が恰も龜の形狀を爲したるによるのである。以上の如くなるがゆゑに、本川は堀河ではない。現在川巾廣きは八十六間(川口)狭きは十五間五分に至つて、其の平均は

二十六間三分を有する。架橋には川口より高橋、龜島橋、新龜島橋、靈岸橋の四橋がある。水深は零點以下五尺より四尺を有する。

本川は沿岸には倉庫櫛比し、且つ箱崎川及び日本橋川との連絡あるを以て現時舟運上の須要河川である。

箱崎川

本川は龜島川の上流である。即ち日本橋川の港橋附近より起りて中洲の北西を通り新大橋詰に至るもの之れ本川で、其の延長は五百五十五間九分を有する。又濱町川の川口より中洲の南面と箱崎埋立地との間を流るゝは同支川で、其の延長は五十九間五分を有する。本川は其の現状は大川の一支川と目することを得るのであるが、川の起りは中洲の生じたにより自然に川の形狀を爲したに過ぎないのである。而して中洲は明和八年に於て一度町家が開けたが、其の後寛政年間に至つて治水上害あるものとして撤却されたのであつた。其後明治二十一年に至つて再び修築されたもの之れ現今の中洲である。現在の川巾本川は廣きは三十七間五分、狭きは十三間一分に至つて、其の平均は二十三間七分を有する。亦支川は川巾三十間である。橋には下流より本川口橋、箱崎橋、永久橋、土州橋、女橋、男橋の五橋が架けられ、支川に一橋もない。水深は本川が零點以下四尺で、支川は同五尺を有する。

本川は龜島川を通じて大川の平行川たるの便があり、且つ沿岸には舟運業者多く、龜島川同様に須要なる河川である。

新川及び越前堀

本川は永代橋の少しく下流の川口より龜島川に至る區間で、此の延長三百十間を有してをる。本川は萬治二年の貫通で、即ち靈岸寺が今の深川靈岸町へ移轉された年のことであつた。亦有名なる幕府時代の治水大家河村隨軒の宅地は、現今の一ノ橋の北にありしと言はれてをる。因に本川と少しく下

流に當り越前堀と稱する堀が一筋、尙之より少しく下流に一筋都合二筋何れも堀留となり現存するが、之は越前侯の藏屋敷の周りに堀込まれしものを後世埋築し其の一部を現存するものである。新川の現時の川巾は廣きは十一間四分より狭きは五間四分に至り平均八間七分を有する。橋には川口より一ノ橋、新川橋、三ノ橋の三橋が架かつてをる。水深は川巾狹隘なるにも係らず零點以下三尺を有する。本川は有名なる新川酒問屋の倉庫敷地として、沿岸の全部を使用さるゝのである。随つて舟運も之れ等問屋仲間の爲め其の大部を使用さるゝ。

濱町川

本川は日本橋區綱殻町に於て箱崎川筋の川口より起つて、神田區柳原橋に於て神田川に接續する延長一千三間三分の區間である。而して本川の濱町川とは濱町を通ずるにより起りたるものなるべく。亦本川を寛永圖に見るに今の千鳥橋附近まで畫かれて、夫れより上流は畫かれてない。仍つて考ふるに濱町川は現在に於て見るも、千鳥橋附近までは地質軟弱なるも之れより上手は堅盤であるから濱町川の堀留も現今の千鳥橋附近にあつたものと想像せらるゝ。而して之れより現時の龍閑川と曲折接續するに至つたのは、龍閑川の開通せる際であつた。尙亦本川を神田川へ疏通したのは明治四年のことであつた。現今川巾廣きは九間九分狭きは六間六分に至りて其の平均は八間を有する。橋には下流より川口橋、中ノ橋、蠣濱橋、久松橋、小川橋、高砂橋、榮橋、千鳥橋、汐見橋、鞍掛橋、綠橋、竹森橋、橋本橋、岩井橋、大和橋、柳原橋の十六橋が架かつてをる。水深は川巾狹隘なると兩岸高きが爲めに充分浚深を行ひ得ざるを以て零點以下二尺を保つに過ぎない。

本川は神田川の平行線なるか如き連絡があり、尙且つ沿岸には雜貨問屋多く爲めに相當に使用さるゝ河川である。

龍閑川

本川は外濠筋に於ける常盤橋の上流より分岐し濱町川に接続するもの區間で、其の延長は六百二十五間三分を有する。本川は一名神田堀、又は銀堀（しづなぼり）或は神田八丁堀とも稱されてをる。元祿四年始めて堀割られ以來安政年間に至りて一度埋没せられたるも、其の後近く明治十六年に於て更に再開鑿を見たのである。但し初めて開鑿の時期については、元和年間との説もある。而して龍開川なる名の起りは傳通院空譽上人が寛永年間龍開寺を開かれたるによるのである。但し龍開寺は後年小日向水道町に移されたのであつた。而して龍開川の開通は其の目的舟運ではない、全く火除の爲めに堀割られたが如くに見受けらるゝ。次に本川の流脈を考ふるに、往時の平川（日本橋川）の一分派ならざるかと思考される。即ち下流河床の地質極めて軟弱なると、亦武江年表にも古の平川は神田橋より龍開川を流れたるが如く説かれあるによつて見るも、本川の流脈は今の東西堀留川へ通じたものであらんか。現在川巾最大七間八分最狭四間九分に至りて平均は六間八分を有する。橋には下流より龍開橋白旗橋、西中ノ橋、今川橋、東中ノ橋、地藏橋、九道橋、火除橋、甚兵衛橋、玉出橋の十橋が架せられてをる。水深は川巾狹隘と兩岸の高さが爲め淺深を充分ならしむるを得ざりし結果は、僅に零點位にあるに過ぎない。

本川は兩岸高く貨物取扱上不便あるが爲め局部にあつて使用さるゝの外は、濱町川及び外濠川と神田川との連絡上に使用さるゝものが多い。

外濠川

本川は現今に於ては其の下流は汐留川の上流即ち土橋の上手より、數寄屋橋、吳服橋、廻橋を経て小石川橋詰に至り、神田川の上流へと接続する所の延長三千三十八間七分の區間である。本川は其の大部分は元と江戸城附廓を備ふる爲め、卑地を堀鑿された所謂濠地である。而して現在の小石川橋より一石橋に至る間は略ぼ往時の平川流跡なるべく、亦一石橋より汐留を経て元の溜池に至る間は江戸城附廓を備へんが爲め、慶長七八年の頃堀鑿されたのである。亦赤坂口より牛込口に至る深濠は夫れより

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

二六六

降つて寛永十三年の頃竣成したのである。而して雉子橋より小石川橋に至る間は往時の平川流跡なるが、其の後元和二年神田山の大量を突破し、以て平川の流水今の江戸川千川東に洞通されて以來水脈枯渇したのである。即ち寛永園によるときは、雉子橋の上に僅かに細流を印してをる。其の後寛永四年の頃に於て、組橋の上まで御堀舟入を命ぜられたる爲め開鑿したのである。然るがゆゑに、現今にて中坂下を堀留と稱されてをる。而して現今の地質を見るに、此の當時の水路は昔時の平川流跡より西即ち坂下に偏し居りたるものならんと推考さる。而して堀留より神田川への堀鑿は極めて最近のことである。即ち甲武縁の布設され飯田町驛出來當時の頃であるがゆゑに、此の附近を單に新川と稱することがある。現在川巾不同甚だしく前年來大體の整理されたるものもあるも尙最廣は五十六間五分最狭七間の間にあり、其の平均は千九間三分を有する。架橋には先づ下流より山下橋、數寄屋橋、有樂橋、鍛冶橋、呉服橋、常盤橋、神田橋、一ツ橋、雉子橋、組橋、新川橋、新飯田橋、新三崎橋、堀留橋、三崎橋の十五橋が架かつてをる。水深は不同なるが下流より神田橋附近まで零點以下四尺より三尺、夫れより上流は同三尺より二尺となる。

本川は區間長大、隨つて沿岸に於て使用多く、且つ中央線飯田町間驛へ出入する船舶の上下は本川を利用するの外、神田及び麴町兩區内の須要河川である。

楓 川

本川は櫻川の上流京橋川の合流點より分岐し、日本橋川筋の江戸橋詰に至る此の區間延長六百六十七間である。本川は一名紅葉川とも書き、亦材木川とも呼ぶ。亦八丁堀とも稱ふことがある。而して紅葉川と書くこと正しきが如くなるも、其の來由は明かでない。本川は寛永年間の疏通であつて、寛永園について見るときは今の大通りの中橋より北に四丁南に四丁合せて八丁の間を畫き各町の間には小溝七ヶ所を示し木堀のあることを知らしめてある。即ち楓川筋は材木商の住める所て、彼の一世

の豪商紀伊國屋文左衛門の住めるも此の楓川筋沿であつた。故に本川筋に於ける現在の地質が硬軟常なきは往時材木堀のありし關係によるものならんか。尙亦現に本川筋には材木町の町名もある。而して往時此の川より大通り中橋を経て外濠へ疏水せられありしが、後世之れを埋めて今は跡片もない。現在川巾廣きは二十間一分より狭きは十一間四分に至つて、其の平均は十四間一分を有してをる。橋には下流より彈正橋、新彈正橋、松屋橋、久安橋、新場橋、千代田橋、海運橋、兜橋の八橋が架設されてある。水深は零點以下三尺を有する。

本川は沿岸倉庫業櫛比し雜貨取扱上舟運大にして、且つ櫻川京橋川三十間堀川を経て汐留川と日本橋川との連絡上に於ても須要なる河川である。

西堀留川及東堀留川

西堀留川は日本橋川筋の江戸川詰より日本橋區堀留町に至る堀留入堀を爲して、其の延長は二百五間九分の區間である。本川は一名伊勢町堀とも稱さるゝが、即ち伊勢町の堀なるによる。亦伊勢町は伊勢の國より移住されたもの多きにより起り、隨つて町中の半は伊勢屋の屋號なりしと言ふ。本川は寛永圖には既に東西の二條が載つてをる。而して堀留は西に屈折して本町裏に至りて六十間河岸と稱さるゝは、蓋し當時龍閑川の水脈の下流にてもありしならんと想像さるゝ。亦堀留川の地質の粗弱なるものあるは、近世まで入江なりし結果なるが。尙室町附近一帶は往昔平川河口の三角洲なりしならんかと思考さるゝ。而して前記の六十間河岸は明治初年に入りて堀立たられ、現時の伊勢町瀬戸物町即ち之れである。本川の現在川巾廣きは十九間五分より狭きは八間五分に至りて、其の平均は十七間六分を有する。架橋には川口より荒布橋、中ノ橋の二橋が架かつてをる。水深は零點以下四尺を有する。

東堀留川は日本橋川筋より西堀留口の稍々下流より分岐されて、思案橋より同區堀留町に至る入堀

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

二六八

て此の延長二百九十四間四分の區間である。現在川巾廣きは十九間三分狭きは七間四分に至りて、其の平均十四間五分を有する。架橋には下流より思案橋、親父橋、萬橋の三橋が架設されてをる。水深は零點以下四尺を有する。

東西堀留川は何れも其の沿岸には倉庫櫛比し問屋業者多く爲めに船舶の出入比較的多い。

市の北部に屬する河川

神田川

本川は兩國橋詰の川口より淺草橋萬世橋を経て御茶ノ水の幽邃なる谿間を辿り牛込見附下までの區間で、此の延長二千三百九十五間を有する。本川は御茶ノ水附近を御茶ノ水川(茗溪)とも亦仙臺川とも稱さるゝ。而して仙臺川とは仙臺侯が大堀鑿を施行されたのに因るなるべく。亦神田川の起りは慶長年間或る一説には元和二年飯田坂下平川の流れを停めて其の一ツは神田川を突破せしめ水戸侯邸の川を隅田川へ落し、其の切取土によつて柳原土堤を築き以て、一種の府内の境を定めたるもの之れ神田川である。次て萬治年間に於て仙臺侯に命じて大堀鑿を行はしめられたるにより、以來初めて從來の柳原までの入船を小石川の奥まで溯らしめたのであつた。然れども右以前に於ても神田川なる小さき野水ありしことは、後段の記述によつても想像され得るのである。次に御茶ノ水の由來なるが、御茶ノ水とは現今の駒込の高林寺が慶長三年此の高地に建立されたとき其の寺内に清泉ありたるを以て、之れを酌み御茶ノ水となしたのであつた。然るに此の寺は明暦の大火にて烏有となりしが其の後泉下の大堀鑿せられしとき御茶ノ水出でたと言ふのより起つたのである。即ち此の附近古くより一ツの寒泉の湧出しおりしは事實であつたことは推考さるゝ。現在川の廣きは二十六間狭きは九間に至りて其の平均は十三間一分を有する。橋には川口より柳橋、淺草橋、左衛門橋、美倉橋、萬世橋、昌平橋、御茶ノ水橋、水道橋、小石川橋、飯田橋の十一橋が架設されてある。水深は川口より萬世橋までは零點以下

三尺五寸、夫れより上流は漸くに一尺を保つに過ぎない。之れ御茶ノ水附近の河底は第三紀層の露出せると亦護岸の不完全なるによるのである。

本川は淺草の一部及び神田、本郷、小石川、麴町、牛込の各地に於ける唯一の須要河川で、殊に砲兵工廠へ出入する船舶亦概めて多きがゆえに舟運盛大である。

江戸川

本川は神田川筋の飯田橋詰より溯り有名なる關口の洗堰より僅か上流なる市郡界に至る區間で、其の延長一千三百五十間を有する。江戸川は一名小川とも呼ばれたと言ふが而して江戸川とは江戸へ流れ行く川との意より起つたものならん。本川の水源は井頭川、井草川の二流であるが、目白臺の下に於て初めて江戸川と稱さるゝのである。而して此の地に關口ありて、石堰を築かれて神田上水を分派した。而して江戸川は此の上水の餘水を落して水源を爲しておる。併し右は現今少しく南に偏しありしと言われてゐる。蓋し眞實なるべく、此は現今の地勢よりも首肯し得らるゝ。而して現時の水路は承應年間に於て改修されたものである。

江戸川は昔は平川の外堀として利用されたるが、平川を駿河臺の大壑を破りて神田川へ疏通せし以來は全く此の附近の形勢を一變せしめて、昔時の偲影を有しないことゝなつたのである。現在の川巾は十六間狭きは五間て、其の平均は八間九分に過ぎざるが、現今改修工事施行中なるを以て之れによれば川巾八間以下なるものは全く除かるゝことゝなるのである。橋には下流よりせば船河原橋、隆愛橋、白鳥橋、中ノ橋、小櫻橋、西江戸川橋、華水橋、石切橋、古川橋、掃部橋、江戸川橋の十一橋が架かつておる。水深は零點以上四尺七寸より九尺五寸に至つて川床極めて高きがゆえに全く舟運を缺くも、唯小船を浮べ花季花を賞する位に過ぎない。而して現今の改修工事を横行しつゝあるも、之れ洪水排除の目的以外に出でないのである。

千 川

本川は現今河川としての取扱を爲して居ない。即ち大下水として維持されて居る區間は神田川の水道橋洗上手より起り砲兵工廠内を過ぎて、小石川區林町を経て郡部巢鴨村に達して居る。千川はセングワと稱されて居るが、古は小石川と呼ばれたのである。而して現時の區名之れより起り、亦小石川とは古の村落名で現今の砲兵工廠構内附近に在つたのである。千川は巢鴨町附近にては谷端川ヤハタガハと稱して居る。亦千川と稱するは千川上水より來りたるものなるべく、千川上水は多摩川村百姓太兵衛徳兵衛命を受け、元祿九年に於て六里に亘り堀割を施し、以て保谷村より玉川上水を巢鴨庚申塚附近に引き來つて、駒込、本郷湯島、下谷邊の用水として使用したのであつた。然るに此の上水は享保七年に至つて廢止され、各最寄の村々へ用水として賜はつたのである。以上の如きにより千川は小石川なる古名を採るを以て起れるもので、尙川上によつて考ふるときは本川は今日よりは餘程大きかりしかの如くに想像さるゝのみならず、必ず而かりしならんか。本川は既記の如く現今は大下水であるが爲め舟運は全く缺けて居る。

須賀堀川

本川は淺草藏前高等工業學校と明治病院の中間の川口より新堀川の合流點まで、此の延長を二百四十八間の區間である。本川は須賀町を流るゝにより須賀堀と稱さるゝに至つたのである。古は鳥越川と稱された。而して鳥越とは古の村落名で此の附近にあつたのである。即ち現時の須賀橋は之れを鳥越橋とも稱され、昔時の奥州街道に架せらるゝものである。現在の川巾廣きは十一間、狭きは三間八分に至つて、平均は六間を有するに過ぎない。橋には前記の須賀橋のみである。水深は零點以下僅かに一尺を有するに過ぎない。

本川は川口附近極めて狹隘であるも、能く須賀橋下流までは多くの傳馬船の出入がある。亦千溝を

調節利用して比較的低位に架けられある須賀橋下を通過し、上流の三味線堀川及び新堀川にも出入するものあるも左程頻繁なりと言ふを得ぬ。

三味線堀川

本川は前記の須賀堀の上流より下谷竹町地先大下水落口に至る區間で、此延長四百九十五間を有しておる。三味線堀の名は最上流の舟入溜現在も漸く形骸を存すより流出す状態が恰も三味線に似たるによつて起り、而して舟入溜は昔の姫ヶ池の痕跡なるべくと思考さるゝ。本川の上流は忍川と稱されて不忍池に達しておる。昔三味線堀の左右には殆んど武家屋敷多く、隨つて民家極めて尠かりしと言ふ。實にや、現今も沿岸には倉庫或は水運業者の尠少なるは事實である。現在の川巾は廣きは五間五分より狭きは三間五分に至り其の平均は五間二分を有する。橋には下流より猿福橋、甚内橋、浦島橋、柳島橋、新島越橋、鳥越橋、高橋の七橋が架けられておる。水深は極めて淺く即ち零點上一尺より三尺三寸に至るに過ぎない。

本川は須賀堀川の上流であるが、概して河床淺きと亦橋の高さ低き等の缺點あるが爲め、千満の中位を見計ひ傳馬船の如きもの逆航するの外餘りに使用されない。

新堀川

本川は三味線堀川の落合須賀堀川の上流より分岐し淺草區北松山町田島橋に至る區間で、此の延長六百二十九間を有しておる。本川は寛治の年間千束入谷の排水路として堀割られたるものなるべく、昔時今の千束町附近には千束の池と稱する大池あり、亦沿川は新堀寺町と稱され昔時此の川の左右には寺院多かりしと云ふ。現在の川巾は廣きは八間より狭きは一間八分に至り平均三間を有する。橋には下流より旭橋、壽福橋、老松橋、富坂橋、三筋橋、松榮橋、榮久橋、新堀橋、越谷橋、菊屋橋、松田橋、田島橋の十一橋が架けられておる。水深は概して淺く零點上二尺にあるに過ぎない。

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

一七二

本川は下流の若干に舟運あるの外、上流には之がない。現今改良下水の排除水路に當りたるを以て、相當の幅員に擴張し改修工事を施行中である。

山谷川

本川は山谷の今戸橋下流の川口より淺草區地方今戸町地先髮洗橋に至る區間で、此の延長三百七十八間を有する。而して之より上流は大下水に屬してゐる。本川は根岸川の末流で亦根岸川は石神井用水のことである。而して山谷とは木立の繁れる谷、卑地のこととの謂はれて、關東諸地方にある地名同様である。山谷堀川は前敍の如く谷川であるがゆえに隨つて堀川ではない。左れば山谷堀にあらすして山谷川と稱することの當れるが如くに思はるゝ。昔は廓通ひの船潮なきときは新島越橋今の吉野橋より徒歩にて行きしと言ふがゆえに、略ぼ現在同様吉野橋下流までは潮入充分なりしものならん。現在川巾廣きは二十間(川口)より狭きは三間に至りて、其の平均は七間四分を有する。橋には今戸橋、吉野橋、正法寺橋、髮洗橋の四橋が架けられてゐる。水深は零點以下三尺より二尺を有してゐる。

本川は吉野橋までは舟運可なりにあるが以れより上流は傳馬船位の航通あるのみである。

市の東部に屬する河川

大島川及支川

本川は永代橋東詰の下流熊井町地先の川口より洲崎附近の落口に至る區間で、此の延長一千一百間を有してゐる。本川は二十間川と呼ばれ、其の疏通を見た年次は不詳なるが蓋し油堀川と同年度のことなるべしと言はるゝ。元祿より享保に至る三十年間仙臺堀、油堀、大島川より劃して、永代島以東を所謂木場の本地として、願人秋田利右衛門等に於て官に願ひ、填築せるもの合計三十八萬坪と聞くがゆえに、此の間に介在する支川筋の疏通年次を窺知し得るならんか。而して延寶より天保の頃まで門前町の華街へ通ふ船日々織るが如しと言ふがゆえに、相當に使用されたるものであらん。現在川巾廣きは

四十八間川口より狭きは七間に至りて、其の平均は十四間六分を有する。橋には川口より練兵橋、越中島橋、黒船橋、石島橋、蓬萊橋、平野橋の六橋が架設されてをる。水深は零點以下四尺を有する。

亦大島以西支川は深川區諸町より分岐し油堀川を横斷し仙臺堀に接続する區間で、延長四百三十六間を有する。川幅は廣きは十四間四分狭きは六間一分に至りて、其の平均十間九分を有する。橋には川口より巽橋、福島橋、縁橋、元木橋、松永橋の五橋が架設されてある。水深は零點以下四尺より三尺を有する。

同東支川は同區入船町より分岐し中途油堀川の上流と接続し、超えて仙臺堀川に接続する區間で、其の延長四百二十六間を有する。現在川巾廣きは十四間二分狭きは九間に至り平均十二間四分を有する。橋には船木橋、榮島橋、鶴壽橋の三橋が架かつてをる。水深は零點以下三尺を有する。右の外大島川より岐るゝものには南黒江川がある。同區中島町より蛤町二丁目に至る區間で、延長二百二十六間六分を有して、川幅は十間五分より三間三分に至りて、其の平均八間三分を有する。橋には中島橋、外記橋、松島橋の三橋が架けられて居る。水深は僅かに零點を保つに過ぎない。

尙北黒江川は大島川西支川より岐れ黒江町に至る延長七十八間の區間で、川幅は十一間七分より七間二分に至りて其の平均十間一分を有する。橋には坂田橋が架けられて居る。水深は零點以下二尺を有する。

中ノ川は同區數矢町に於て大島本川より分岐し同區龜久町に於て仙臺堀川に接続する延長四百三間の區間で、川幅は二十一間八分より十四間五分に至りて其の平均十八間三分を有する。橋には沙見橋、鶴歩橋、大和橋の三橋が架けられて居る。水深は零點以下四尺を有する。

大島川本川及び各支川の内南黒江川を除くの外は各沿岸には倉庫多く建設されあり、隨つて舟運大なる河川である。

油堀川及支川

本川は深川區佐賀町地先の大川筋口より大島川西支川を横斷して、島田町二番地先に於て大島川東支川に接續する區間で、延長九百三十間を有する。本川は一名富岡川と稱されて居る。而して此の川は延寛圖にも見へ居るがゆゑに開鑿は極めて早かりしものなるべく、即ち隣川の仙臺堀川よりも二、三十年早きが如くに推考される。而して往時は其の下流は永代島と隅田本流の一派川との界境を流れしものなるか。現在川幅廣きは十五間三分狭きは九間四分に至りて、平均十三間八分を有する。橋には川口より下の橋千鳥橋、黒龜橋、永居橋の四橋が架設されておる。水深は零點以下四尺を有する。亦本川の支川には二流ありて其の一たる東支川は同區敷矢町二十番地々先より東仲町地先深川八幡社前橋に至る區間延長百四十四間六分を有して、現在の川幅廣きは九間七分狭きは三間六分に至り其の平均六間六分を有する。水深は零點以下一尺を有する。

西支川は深川公園裏橋より東仲町地先深川八幡社前橋に至る區間延長三百十五間四分を有して、現在川幅廣きは四間四分狭きは一間三分に至つて平均三間一分を有する。橋には何れも公園に通する小橋三橋が架けられて居る。

油堀本川は沿岸舟運業者の倉庫櫛比され、隨つて舟運上の使用大なりである。但し支川にあつては東支川の一部のみ使用され、他は殆んど舟運を援くる幅員及び水深を有して居ない。

仙臺堀川及支川

本川は深川區佐賀町一丁目地先に於ける隅田川筋の川口より大横川に接續する區間で、此の延長一千二十四間四分を有する。本川は往時十間川と稱された。尙大横川交叉點より上流は現時の如く二十間川と稱されたことは今日と同様である。本川及び二十間川とも共に元祿六年の圖にはないが正保圖に見るときは永代島即ち新田島シノダジマ佐賀町相川町小松町黒江町の部分部分を島としての隅田川の一支流、

此の所を通じたるが如くに考へられる。然るに元祿の頃に至つて既に一帯の海汀は去つて茅地を現はしたるものならん。仙臺堀川は元祿十三年に於て仙臺侯命を受けて之れを開鑿したがゆゑに、仙臺堀の名あるのである。而して此の頃より木場の新地開かれて以て濱海の沙洲は縦横に舟入堀を通じ、其の頃より漸次此の附近開け來りて、元祿十一年には永代橋の開通を見たのであつた。尙亦本川より分岐する福富川も同年頃開鑿されたのである。現在の川幅廣きは二十四間二分狭きは十三間六分に至りて其の平均十八間八分を有する。橋には川口より上ノ橋、海邊橋、龜久橋、要橋、崎川橋の五橋が架つて居る。水深は零點以下四尺を有する。

亦本川の支川たる西支川は深川區永堀町より材木町地先に於て油堀川に接續する區間で、此の延長百四十三間を有する。現在川幅廣きは十間一分狭きは五間に至り、平均九間二分を有する。橋には相生橋、丸太橋の二橋が架設されて居る。水深は零點以下三尺を有する。

本川の上流たる二十間川は仙臺堀川上流に於て大横川より分岐し横十間川に接續する區間で、此の延長四百四十間を有する。現在川幅廣きは二十三間五分狭きは十七間に至つて其の平均二十二間五分を有して居る。橋には豊榮橋、豊住橋、千田橋の三橋が架けられて居る。水深は仙臺堀本川同様に零點以下四尺を有する。

仙臺堀本川より岐る、福富川は深川區平屋町より扇川町二丁目なる大横川に至る區間で、此の延長四百八十九間を有する。現在川幅は廣きは十間九分狭きは九間一分に至りて、其の平均十間を有する橋には吉岡橋、水本橋、富島橋、福永橋の四橋が架つて居る。水深は零點以下二尺を有する。

亦福富川支川は末永町七番地先より同五番地先まで延長七十四間の區間で川幅は十間より八間五分に至りて其の平均は九間二分を有する。橋には青梅橋が架設され水深は本川同様の零點以下二尺を有して居る。

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

二七六

以上の本支川は何れも沿岸に倉庫多く、隨つて舟運極めて大なる河川であり、且つ大横川及び横十間川への通路としても航通大なるものがある。

中ノ堀川

本川は深川區佐賀町一丁目に於て大川筋の川口より堀川町地先に於て大島川西支川に接続する區間て、此の延長二百一間を有する。現在川幅十一間二分より狭きは五間三分に至つて其の平均九間二分を有する。橋には川口より中ノ橋、豊島橋の二橋が架設されて居る。水深は零點以下三尺を有する。本川は兩岸倉庫充滿し、區間短きに拘らず舟運大なる河川である。

小名木川

本川は深川區大工町地先に於ける大川筋の川口より中間に大横川及び横十間川を横斷し、尙郡部に入り中川を横斷し以て江戸川に接続するものなるが、其の内市部に屬するは横十間川に至るまで、此の延長一千三百五十三間六分の區間である。即ち本川は市郡部を通じて言ふときは最長距離の河川である。

本川は船堀川を通じて葛西行徳に通ずるによりて行徳川とも呼ばれて居り、而して其の運輸は古來より日本川に次ぐ河川であつた。名稱の起因を案するに古圖には「ウナギ澤」宇奈岐澤又は女木とも書かれあるが、或は慶長年間に於て疏通されし當時小名木四郎兵衛と言ふ者其の事に預りしにより名附けたるかとも言はる。而して小名木村なるものは當時は小松川町の東方にあるも、天正年中小名木四郎兵衛の開きたるにより村名を爲すとも稱さるゝが何れが正しきにや。次に本川の疏通を見たる説に對しても慶長年間なりとか、或は天正年間の堀割なりとも傳へらるゝが正確ではない。兎に角府下第一の古き堀江なることは首肯し得る。而してウナギ澤とも稱するがゆゑに、鰻の漁れし堀江たりしことも首肯し得るのである。現在川幅廣きは二十七間五分より狭きは十三間三分に至りて其の平均

十七間六分を有する。橋には川口より萬年橋、高橋、新高橋、小名木橋の四橋が架設されて居る。亦水深は零點以下四尺を有する。

本川は都下第一位の舟運頻繁なる河川である。殊に近時沿岸に工場増設されたるが爲め、一層に舟運を盛大ならしむるに至つた。

源森川

本川は本所區向島堤防起點附近の川口より枕橋を経て、小梅瓦町に於て大横川上流に接續する區間で、此の延長三百三十五間を有する。本川は寛文三年に於て業平川より大川まで横川を掘擴げて、之れを源森川と稱したのであつた。然るに隅田川の高水は此の川を逆流し來りしにより、現時の源森川の地に於て切土手を築きて之れを防ぎたるは寛文十三年のことである。茲に於て之れより此の土手の西を源森川又は源兵衛堀と稱し、東を大横川入江或は横川入江と唱ふるに至つた。現時は兩者を併せて源森川と稱する。現在川幅廣きは三十三間八分狭きは二間八分に至りて、其の平均は十二間二分を有して居る。橋には川口より枕橋、源森橋の二橋が架けられ、而して源森橋には開扉を取付けて荒川出水の侵入を調整して居る。水深は零點以下三尺を有する。

本川は大横川及び北十間川、曳船川との連絡上需用なる河川である。近時吾妻橋より北十間川及び天神川に至る巡航船の通ずるものありて、一層舟運の便を増しつゝあるの現況である。

北十間川

本川は源森川の流末と大横川との合流點より分岐し中川に至るものであるが、市部に屬するは横十間川が分岐するまでの區間で、此の延長五百六十五間七分である。本川は横十間川に對して北十間川と稱ふるのて、源森川と相通じ其の堀割を爲したるは萬治年間ならんと言はるゝ。而して其の際は小梅の隅田川より中川へ貫通したるが如きも、源森川を堀るに當りて遂に中間杜塞したるが如くに思考

さるゝ。而して其の後源森川に通じたるは、先年即ち明治四十一年市區改正により新に開鑿されたのである。現在川幅廣きは十一間六分狭きは八間二分に至つて、其の平均九間九分を有する。橋には小梅橋、押上橋、上押上橋、十間橋の四橋が架設されて居る。水深は零點以下三尺より二尺五寸を有する。本川は中川と隅田川との連絡あり、加ふるに近時淺草停車場及び京成電車の停車場が設けられ、亦附近には龜戸停車場あり、尙亦沿岸には紡績會社等あるが爲め相當に使用さるゝに至つた。即ち本所區の北部に於ける須要の河川である。

大横川及支川

本川は本所深川の兩區を縦に切斷貫通され、其の下流は洲崎の附近大島川の上流より一直線に仙臺堀川の上流に接して小名木川、堅川を横斷し本所の源森川の流末に至る區間で、此の延長二千五百三間三分を有する。本川は一名横川と稱され、且つ天神川を以て横十間川と呼ぶに對して大横川の稱ある所以である。本川の開通は横十間川と同様に萬治年間であるが、併し其の當時の堀割區間は中ノ郷より大榮橋まで、あつた。而して夫れより下流は元祿八年乙亥に於て新に起工されたのであつた。仍て此の附近を亥の堀又は亥の堀河岸と稱され、現に今其の河岸を存して居る。現在川幅廣きは二十二間二分狭きは六間六分に至りて、平均は十七間二分を有して居る。橋には上流より澤海橋、武市橋、喜留橋、大榮橋、扇橋、猿江橋、菊川橋、南辻橋、北辻橋、江東橋、鐵道橋、長崎橋、法恩寺橋、横川橋、業平橋の十五橋が架設されて居る。水深は零點以下四尺を有する。

大横川の支川は深川區茂森町三番地より扇町二番地に至る區間で、此の延長二百二十五間を有する。現在の川巾廣きは十三間七分狭きは八間に至りて、平均は十一間七分を有する。橋には龜井橋が架設せられ、水深は零點以下二尺を有する。而して本川は深川木場の中心とも稱したるならんも、現今は繁榮左程でもない。現に沿岸を木場河岸とされて居る。

大横川の沿岸は長區間に亘り倉庫工場多く、亦源森川、堅川、小名木川、仙臺堀川、油堀川、大島川等の重要河川との接續あるがゆゑに、随つて本所深川兩區内に於て舟運上緊要の河川である。

横十間川

本川は略ぼ前記の大横川と平行線と爲す河川である。而して本川を以て縣市の境界を爲すのである。本川の下流は十間川の upstream に起り小名木川、堅川を横斷して、北十間に接續する此の延長二千二百四十分の區間である。本川、龜戸天神附近をも神川と稱され、勿論天神社に隣接せるによるなるべく、亦十間川とは川幅約十間を有するに由るべく、横十間川とは堅川に對して斯く稱さるゝのである。而して本川の開鑿は萬治年間の事なりと言ふ。現在川幅廣さは十三間八分、狭きは五間五分に至りて、其の平均は十一間二分を有する。橋には下流より番羽橋、岩井橋、三島橋、大島橋、清水橋、旅所橋、鐵道橋、天神橋、柳島橋の九橋が架設されておる。水深は零點以下三尺より三尺五寸を有する。

本川は近時沿岸に製造工場増設され、随つて之れ等へ貨物の運輸の爲め出入する船舶極めて増加し來り、尙將來も舟運上有望なる河川である。

堅 川

本川は本町區兩國橋の下流元町地先大川筋の川口より大横川、横十間川を横斷し中川に接續する河川であるが、内市部に屬するは横十間川まで此の延長一千五百二十一間五分を有する區間である。本川は横十間川、大横川と共に萬治年間に於て本所地割を行つたとき疏通されたもので、其の奉行は徳山五兵衛なりしと言ふ。此の事については古書には「江戸横山町と葛西逆井渡頭とに於て狼烟を掲げて標準を定め、中二十間深一丈四尺の川路を堀割る」とあるは蓋し此の事ならんか。而して本所の地官民の囑望するに至りたるは、明暦三年江戸大火の爲め一字をも餘さざりし以後のことである。即ち萬治二年には兩國橋の架設されたるが如きは此の例證ではないか。現在川幅廣さは四十一間、川口狭き

東京市の水利と改善に對する私見(其二)

二八〇

は八間八分に至りて、其の平均十九間二分を有する。橋には川口より一ノ橋、二ノ橋、豎川橋、三ノ橋、新辻橋、四ノ橋の六橋が架設されておる。水深は零點以下四尺を有する。

本川は小名木川に次ぐ舟運ある河で、隨つて沿岸倉庫多く、加ふるに大横川横十間川等の連絡あるが爲めに本所區内唯一の要用河川である。

六間堀川及び五間堀川

本川は豎川と小名木川との連絡川で本所區松井町二丁目にあつて豎川より分岐し常盤町二丁目に於て小名木川に接續する名の區間で、延長五百四間を有する。本川は幅六間に堀割られたるより六間堀の稱あるのである。而して堀割の年次は蓋し大横川豎川と略ぼ同年頃ならん。此の附近は深川元町と稱されて、普元和の頃隅田川の一支流は今の仙臺川油堀を傳へて洲崎へ流れたるとき既に一部落を爲せるもので、深川町家の起りは此の邊なりと思考さるゝ。因に本川の、小名木川への出口には俳聖芭蕉の趾ありしと言ふ。現在川幅廣きは八間狭きは四間四分に至りて、其の平均六間三分を有する。橋には下流より細川橋、猿子橋、中ノ橋、北ノ橋、山城橋、松井橋の六橋が架けられておる。水深は川幅の關係上僅かに零點以下二尺を有するに過ぎない。

本川より分岐し松井町林町を経て小名木川に接續する五間堀川は其の延長五百八十間を有して、當時川幅五間に堀割られたるを以て此の名あるのである。現在川幅廣きは十一間狭きは四間八分に至りて、其の平均は六間八分を有する。橋には下流より入舟橋、東元橋、伊豫橋、大久保橋、彌動寺橋、新山城橋の六橋が架けられておる。但し五間堀川より分岐し瓢箪堀たるものありしが、大正二年頃埋築して今はない。水深は川幅狹隘の爲め僅かに零點以下一尺を有するのみである。

右二川は沿岸に於て若干使用さるゝの外、六間堀川は小名木川と豎川との連絡上使用さるゝ河川である。

洲崎川

本川は洲崎辨天町遊廓の東面及び北面の河川で大島川の上流に接続され、此の延長四百七十五間を有しておる。而して海面とは一の堤防を以て界してある、洲崎川の名稱は洲崎なる土地に因みたるものである。洲崎の初めて埋立られたるは元祿年間であつたが、其後明治十六年に至りて全く修理されたのである。而して洲崎の地古く海中に設けられたるは全く隅田川一派川の河口に當りたるが故に早くに洲渚の堆積を見たるによるなるべく、亦當時干潮の名賞たりしよりも前説を首肯し得らる。洲崎附近は近時に至りても海嘯甚だしく既に四十三年の大海嘯あり、昨年亦同様の災害を蒙り死傷尠少ならざりしが、昔時に於ても海嘯繁く、寛政三年九月四日の如きは數矢町入舟町一圓流失したと言ふ仍て之より西は入舟町を限り、東は吉祥寺門前まで二百八十五間町家を取拂ひ疊地に爲し置いたと言ふ。而して今は現に深川區平富町二丁目三番地先に存在せる一の石碑を以て知られる。曰く、此の所寛政三年大波あり死人尠からず此の後もなしと言ふ可らざるにつき之れによつて西入舟町を限り東吉祥寺前に至る長二百八十五間家屋置く可らず海嘯の暴威抗す可らず、云々の意味ある文字を彫刻し後世人に注意を與へておる。而して此の碑は寛政六年甲寅十二月に建立したるもので、其の裏には葛飾郡永代浦云々とある。即ち此の邊永代浦なりしが。現在川幅一間八分より六間八分に至りて其の平均九間六分を有する。橋には辨天橋、洲崎橋が架設されておる。水深は零點以下二尺を有する。本川は舟運としては記すべきものがない。唯廓内の糞尿其の他一部の貨物出入の爲め傳馬船其の他の通航あるのみである。

十間川

本川は横十間川の流末を受けて二十間川と平行しおり深川區西平井町に於て大横川に合流する區間て、此の延長五百十一間を有しておる。本川は横十間川開鑿のとき出來せしものなるべく、十間川と

は幅十間に開鑿せしによるならんか。洲崎の北平井町は明和三年の開拓なるが世に之れを二十萬坪と稱し、亦十間川二十間川間の今の豊住町は之れを六萬坪新田との稱ありし。尙亦此二十間川沿は千田新田十萬坪と稱し、正徳享保の頃成りしならん。而して千田とは新鑿の願人近江屋庄兵衛なるもの近江の國千田氏より出たるによると言ふ。而して此の附近より海汀の初めて退きしは極めて古きことなるも、陸地の體裁を爲せるは全く近年のことであつた。以前は卑濕にして分遠の巻地に過ぎざりしは勿論であつた。現在川巾十一間より八間八分に至つて、其の平均九間五分を有する。橋には川口より富士見橋、中住橋、古川橋、豊平橋の四橋が架けられておる。水深は零點以下二尺を有する。

本川は西平井町一體の爲め若干の傳馬船其の他により貨物の出入あるの外大なる舟運はない。

曳船川

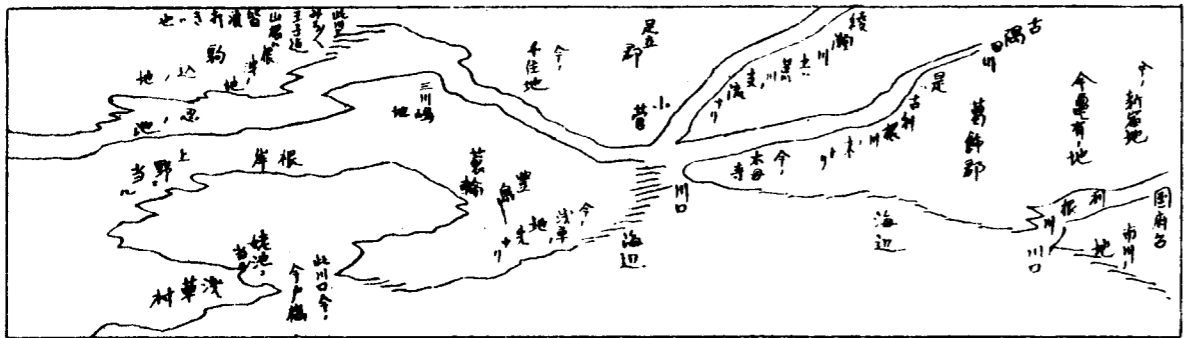
本川は本所小梅瓦町に於て北十間川の川口より本所請地町市郡境界に至る、此の延長四百八十九間四分の區間である。曳船川は元祿年間本所深川の用水として府下南葛飾郡龜有村より引用し來りたるもので、之れを葛西用水龜有用水とも言ふのである。而して享保年間に至り通船運河に用ゐられ、兩岸道路で曳船を爲したにより引船川引船堀の名稱が起つたのである。現在川巾幅間より四間に至り、平均四間四分を有する。橋には川口より葛西水門、東武鐵道驛橋、八反目橋、庚申橋、七本松橋、請地橋の六橋が架つておる。水深は極めて淺く僅かに零點上二尺を保つに過ぎない。

本川は既記せる通り現時も用排水路として使用され、現に川口に水門を設けられある程なるにより、隨つて大なる舟運はない。唯沿岸の貨物出入の爲め傳馬船等の出入あるのみである。

各埋立地間の運河

明治四十四年七月竣功した隅田川口改良第一期工事、及大正六年三月竣功した同第二期工事、並に大正六年三月竣功せし市内河川大浚渫工事より得た各埋立地に於る運河の狀況は次の如きものである。

第一號圖(其一) 古江戸の圖



八百七十年頃の江戸
 此圖は江戸の長元園を
 載せ、その長元園を
 修天宮の御宇に於て
 古の江戸の地を以て
 最も古きものなり

第一號圖(其二) 古江戸の圖



太田道灌時代の江戸

此の圖は後花園天皇の長祿年中に於ける江戸
 園を以て、拾も太田道灌が江戸城を築き終りし年
 子一七の頃を去る四百九十一年前より五十年

(明治四年)



第一號圖(其三) 古江戸の圖



縮尺三十分之一

船舶通行區域	共同物揚場所在位置
--------	-----------

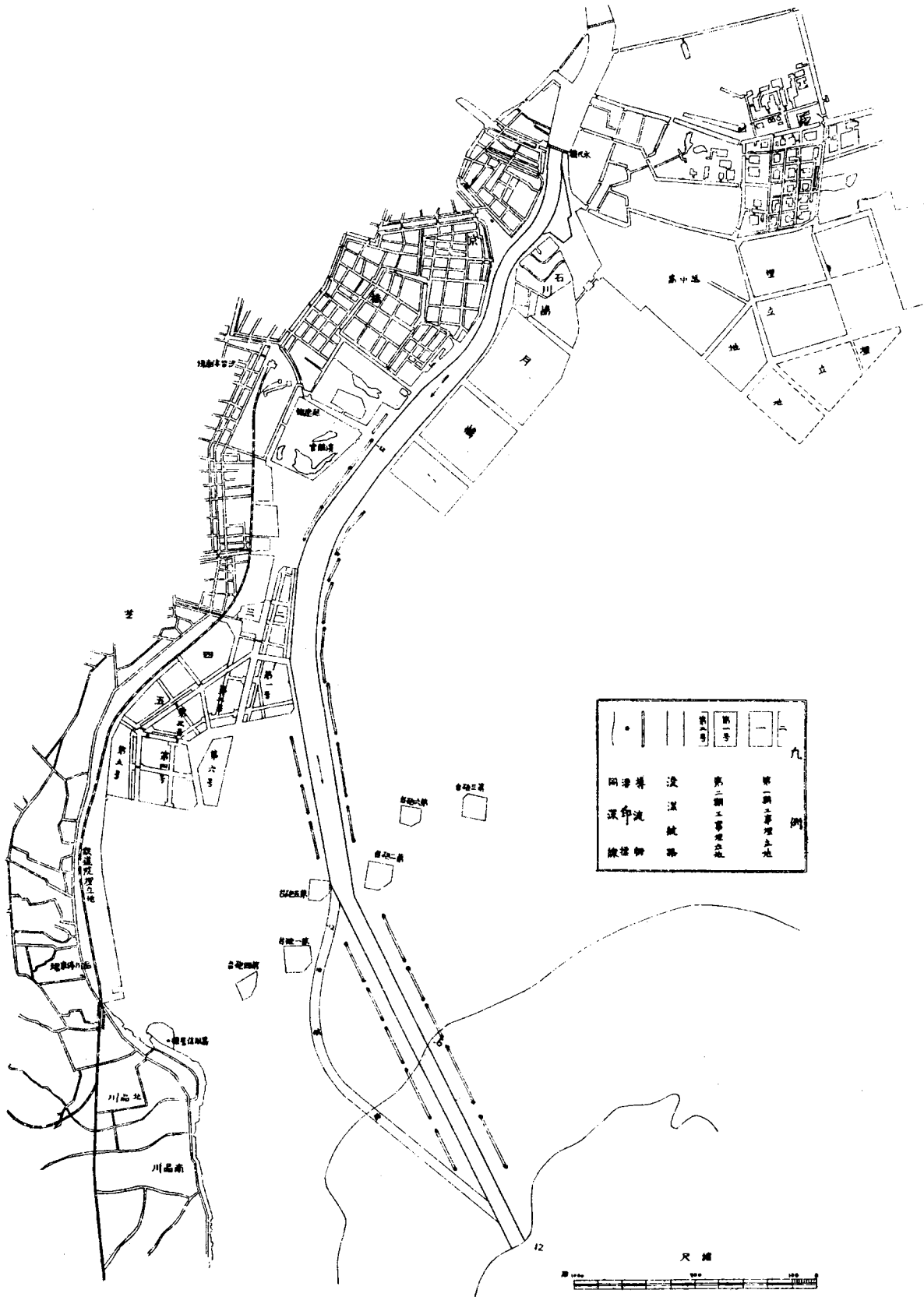
凡例

東京市全圖



圖面平口川田隅 圖號四第

尺 縮
一分十三百二十四万四



(一)月島舊第二號地と新三號地間 本運河は隅田川口改良第一期工事に依り得たる運河で、此の延長二百九十五間幅員二十間水深零點以下四尺五寸を有す。橋には濱前橋、新島橋の二橋がある、

(二)芝浦各埋立地間 本運河は第一期乃至第二期の河口改良工事により得たる總延長二千二百九十間一分の内幅員最も大なるは三十五間のもの其の延長は七十間、及び幅員三十間のもの其の延長八十間一分ありて、之れ等は何れも水深零點以下六尺五寸を有す。次に幅員十五間のもの延長一千百三十八間二分、幅員二十間のもの延長百六十間、幅員十間のもの延長百間、其の他在來水面との取付延長十一間八分は何れも水深零點以下四尺五寸を有す。尙目下工事中なる第六號埋立地と在來第三號乃至第四號埋立地との中間運河は延長四百三十間を有して、其の幅員は廣きは八十五間、狹きは三十間を保ち、其の水深は零點以下六尺五寸を有す。

次に各埋立地間の橋梁は目下工事中のものもあるも、既設の分は先づ陸近くよりせば、生洲橋、新濱橋、南濱橋、入江橋、鹿島橋、新芝橋、藻鹽橋、八幡橋、百代橋、八千代橋、月見橋の十一橋が架設されてをる。

(三)平久町及び越中島地先埋立地間 本運河は市内河川大淺濶工事によりて得たるもので、運河の總延長一千六百五十四間一分にして、其の内洲崎川より分岐し海面に至る即ち洲崎西面の運河は延長二百五間三分、幅十間水深零點以下三尺を有し、亦大島川より分岐し埋立地一、二號地間を経て南端海面に至るもの延長五百二十四間九分、幅員は廣きは二十間、狹きは十五間に至り平均十七間八分を有し、水深は零點以下三尺を有す。亦深川區平久町一、二丁目鹽濱町間の分は延長三百二間五分は幅十間にして、水深は零點以下四尺を有す。亦同區鹽濱町及び埋立地一號地即ち洲崎西南角より起つて越中島と埋立地二號地間の海面に至るもの延長六百二十一間四分は、幅二十間水深零點以下四尺五寸を有す。橋には殆んど未成なるが最初出來せる埋立地即ち平久町一、二丁目鹽濱町間に於ける運河には、平久橋、時雨橋、千舟橋、芦洲橋、矢竹橋の五橋が架設されてをる。(未完)